

建設トツプランナー フォーラムin豊田

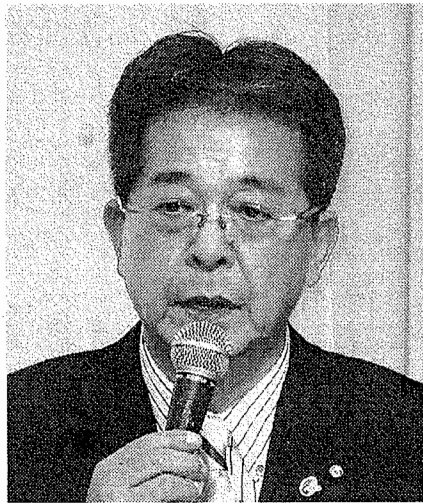
■ 2 ■

地域の森林や川、生態系をどう守っていくか。フォーラムを主催した中部森林開発研究会の梅村正裕会長ら3人が取り組みを発表した。

樹木廃棄物を有効活用する「ウッドチップリサイクル工法」の普及に取り組む中部森林開発研究会は、創立28年を迎えた。「川に清流を、野山に緑を」のスローガンの下、中部地区からスタートした研究会は、いまでは北海道から沖縄まで14支部、会員111社を擁する規模になった。研究会が目指すのは森林を通じた環境保全だ。研究会が当初から掲げているテーマは「森林資

事例発表Ⅰ

森と水と生物多様性



森林を通じて環境を保全

梅村正裕・中部森林開発研究会会長

源の100%活用」。良の木材は、どんな時代でも需要があり、流通する。しかし、林業経営が成り立つためには、低質材をどう活用し、利益を出すかがポイントになる。樹木の幹の部分は建築用材、土木資材、造園資材などに活用されるが、大量に発生する枝、根、葉などは、長年にわたり、山に捨てたり、埋めたり、燃やしたりしてきた。これを資源化しようという

をかけたいたが、スクリーンの網目を換え、チップのサイズを調整することで品質が高まった。さらに、チップを散布する機械「バークプロア」を導入。長さ約100分のホースを使い、法面にチップを吹き付ける緑化工法に取り組んだことで、チップの資源化が軌道に乗った。今では、派生商品も増えた。細長いネットの袋にチップを詰めて利用する「フィルターストックス工法」や「エコ法枠」、カラーチップマルチング、竹ソダと竹チップを組み合わせた濁水処理システム、ウッドチップ樹脂舗装など、活用の幅も広がりをみせている。また、本業以外でも、

「緑豊かな自然環境を守るといふ視点だけでなく、新しい自然を創造し、緑の復元を促進する独自のシステムを全国に広げたい」(梅村会長)。同研究会はこれからも、勉強会や実技講習などを通じて、相互に助け合う全国的な会員のネットワークに磨きをかけていく方針だ。梅村会長は「未来の子どもたちに誇れる自然環境を実現するため、青い空、森林の緑、澄んだ水の環境づくりをしていきたい」と話した。

（建設新聞社(仙台) 小島義弘、建通新聞社 荒木勝己）